

「一粒のお米が世界を笑顔に」

長野県伊那北高等学校 1年

向山 創太

「お米を残したら目がつぶれるよ」

私が小さい頃から祖母に言われてきた言葉だ。同じようなことを言われたことのある人も多いのではないだろうか。お米一粒一粒を大切にするために。

私が通っていた中学校の伝統行事に「落ち穂拾い」というものがある。稲刈りを終えた田んぼで落ちている稲穂を拾い集めるというものである。これらのお米は拾わなければ自然と土に返るだけである。落ち穂拾いはこの学校に70年続くのだが、戦後の食糧難は厳しく、少しのお米も無駄にしてはならなかったのだと祖父から聞いた。一粒一粒のお米を大切にするという精神が70年もの間受け継がれてきたのだ。

私たちは落ち穂拾いで拾ったお米で毎年支援を行ってきた。拾ったお米はこれまで、ルワンダやエチオピア、マリ共和国に支援米として送ったり、お米を販売して得た収益金を義援金として東北の被災地に寄付したりしてきた。度重なる台風の影響で中止となってしまった年もあったが、そんな年はそれに変わる支援がしたいと考え、募金活動を実施し支援を行った。

私は小さい頃から農業が大好きで、祖父の田畑によくついて行った。特に田んぼへ行きお米を育てることが好きだった。それは今でも変わらない。自分でもお米を育てているからお米一粒一粒を大切にしないでという気持ちが強くなる。だから私はこの「落ち穂拾い」と支援活動に誇りを持って行ってきた。

私は恵まれている。豊かな国で生まれ育ち、生まれてからずっと食べることに困らず生活してきた。だから飢餓について考えることもなく、毎日当たり前のように三食食べてきた。しかしこれは決して当たり前のことではない。世界には飢餓で苦しむ人たちがたくさんいる。いつ食べ物を口にできるか分からない中で必死に生きている人たちがいる。今この瞬間も飢餓に苦しんでいるかもしれない。それなのに私は、母から「朝ご飯はしっかり食べなさい」と言われると、嫌々食べたこともあった。時には残すこともあった。食べたくても食べられない人たちがいるというのに。

そんな私にできることは何だろうか。私はこう思う。「たとえ一粒のお米でも食べ物を粗末にしないことではないか」と。たった一粒のお米では誰も救えないかもしれない。しかしみんなが大切にしようと考えれば、その一粒は茶碗何杯分にもなるだろう。きっと想像以上の量になる。それで世界中のどれだけの人たちが幸せになるのだろうか。そう考えると、自分にもっとできることがあるように思えてならない。

私はこれまで落ち穂拾いや募金活動で様々な支援を行ってきたが、世界に目を向け、世界中の飢餓を解決するための力になろうとすれば、お金や食料支援だけでは根本的に解決しないのではないかと思う。現地の人たちが自分たちで安定して食料を確保することが解決への大きな一歩となるだろう。それを実現させるため、私は現地へ行って栽培方法の指導に携わりたいと思う。私は祖父からお米をはじめ、様々な農作物の育て方を教わってき

た。だから今度は、私のその知識を世界中の飢餓をなくすために使いたいと考えている。これも私にできることのひとつだと思う。

「食べる」は笑顔につながる。食べられることは幸せなこと。私はその幸せを世界中のみんなと共有したい。世界から飢餓で苦しむ人をなくしたい。少しずつでもいい。少しずつでいいから地道に一步ずついい方向へ進んで行ってほしい。だから私は自分にできることは何でもしたい。まずは感謝の気持ちを持ってご飯を残さずいただくことから。そして将来、国際ボランティアとして世界のために力になりたい。私にできることで世界を変えたい。

世界中の誰もが「食べる」ことで幸せになれるように。